

〔随筆〕

高校教員として漢文を教えてみて

中村隆志

1. はじめに

今自分は国語科の非常勤になって二年目です。そして初年度がコロナ禍とぶつかりほぼイレギュラーな日程での授業を行いました。二年目は若干元の通りのスケジュールに戻ったとはいえ、行事等の日程変更や内容変更等がありました。

自分はまた国士館大学大学院の学生でもあります。大学生時代、大場一央先生の講義で漢文学の世界に魅了されました。今は漢文を読む同好会に参加しています。この会は週に一回 zoom 上で集まり、朱熹の『四書章句集注』をそれぞれ持ち回りで読んでいます。講師の方は漢文の研究者で、参加者には大学生や大学院生、大学の非常勤講師の先生、新聞社に勤めている方など、年代も二十歳前後から五十代まで様々な人がいます。ここでは『四書章句集注』の本文を書き下して、その内容について話し合います。白文を書き下し文にするというのは、漢文を決められたように読むことよりも自分がどのように解釈したかが大事になります。

中学高校で習ってきた漢文と違い、自由な漢文を趣味として楽しんでいます。その一方で、同好会での読書会を通して、自分が教師としても学習者としても未熟であることを日々痛感し、至らなさを反省する毎日です。本稿では、大学院や同好会の場での学びをふまえ、高校でどのような漢文の授業を行っているかについて記していきたいと思います。

2. 授業クラスの様子

私自身は 2020 年 4 月に着任して以来、高校一年生の国語総合の古典、高校三年生のスポーツクラスの古典を担当しました。

高校一年生は、漢文を中学で習ってはいるものの、知識にはばらつきがありました。返り点、置字、再読文字をしっかりと覚えている生徒から、レ点についておぼろげに覚えている生徒までいました。そういった背景のため、高校一年生では訓読の基礎から授業を始めました。

返り点が不安な生徒には、「レ点とはスキップのようなものであり、一点を踏んだら強制的に二点へワープする」などゲームのような説明を心がけました。その結果、ゲーム感覚で書き下しに挑戦してくれました。

漢文の授業ということで、興味なさそうに聞いている生徒もいますが、その一方で小説好きの生徒は小話こばなしにくいついてくることもあります。私が担当した中では、『史記』の項羽本紀を扱った時の「楚漢戦争」の経緯や「左遷」などの語源について楽しんでいるようでした。

高校三年生は主にスポーツクラスの担当をしました。このクラスは、ほとんどの生徒が推薦で進路を決めます。また、他クラスの古文から独立しているため、知識よりも内容の楽しさを大事にしました。

将来警察になりたいという生徒が多かったため、孟子の性善説や荀子の性悪説といった作品を選び、彼らの正義や信条について書いてもらう活動を増やしました。性善説と性悪説の両方を読んだ感想を生徒に書いてもらうと、「性悪説は言い過ぎだと思う」や「性善説も性悪説も勉強しろと言っていて嫌い」などの意見がありました。中には「自分の部活動の顧問の先生が性悪説で行動していると思う。」や「校則は性悪説で書かれていると思う。」といった意見もありました。本来の意図からは外れるものの、生徒の身の回りや本文をリンクさせて考えられていることに感心しました。

楚漢戦争を扱い項羽についての説明をしたとき、『キングダム』を愛読している生徒が、話の中心人物である項羽は楚の国の大將軍項燕の孫であることに気づきました。また、楚の国の位置や秦にとっての最後の敵となる強国であることなどを周りに解説してくれました。中には統一後始皇帝がすぐに亡くなってしまい、秦も滅んでしまうというネタバレをされたと悲しむ生徒もいました。

授業で扱う文章が韓非子だと作中の登場人物である李斯との因縁の話ができます。また、同時代の話から生徒たちが当時の中国がどんな様子なのか世界観をイメージでき、その時のモラルなども理解するため、登場人物の行動理由や信条の理解度も上がっている印象を受けました。『キングダム』は楚漢戦争の直前の戦国時代を舞台に、秦の始皇帝の活躍を描いた作品です。教科書にも周辺の時代の作品が載っていることが多いので、『キングダム』は現在、授業に生かしやすいものとなっています。

実際には授業で扱っていませんが、漫画の中で登場するもしくは登場予定の廉頗・藺相如や荊軻の話も教科書に載っているので、こういった教材を扱うと生徒からも喜ばれると思いました。また可能であれば漫画のそのエピソードを生徒に読んでもらうことでさらなる深い学びが可能になると考えています。

3. 授業での取り組み——解説

試験も終わりあらためて自分の授業を見直してみると、授業前半で文法の解説をし、後半で自作の返り点の穴埋めや、書き下し問題などのプリントをやってもらっていました。アクティブな授業をあまりできてないなと我ながら思います。実際に教えてみて気づいたことは、現代文の文章は「そして」などの効果を授業内で解説する必要はそこまでありませんが、漢文となるとほぼゼロからの積み上げなので「而」や「於」などを一つ一つ解説することが必要になります（学校にもよると思いますが漢文を扱う授業は大体一年のうちでも限られているので、学年が上がっても一度基礎から解説しなおしになります）。結果として、授業がルール説明に終始しがちでした。自分としては、大学で教わったようなまず内容を読み解き、その魅力を話し、その後文法を解説するといった授業をしたかったのですが、そのような授業をするには自分が未熟で、確実に教えられる、試験の丸付けのしやすい文法中心に逃げてしまったなと思いました。最近の古文の傾向として 2022 の共通テストでも文法の項目が減り、内容読解の問題が増えていたので、時代に合わせた授業をやりたと思いました。

4. 授業での取り組み——iPad の活用

自分が学生の時代と大きく変わったことと言えば、基本的に教室には電子黒板があり、教員と生徒に iPad が配布されていることです。そのため、授業中に細かい解説をしたいときに、その場で関連する画像や、原文を検索して表示することができるようになりました。

例えば、教科書の再読文字の例文として「未嘗敗北。」が出てきたとき、この出典である項羽本紀の前後の文を読むことでどういうシーンの言葉だったのかなどの解説も、その場で iPad に表示した漢文を読みながらできるようになりました。こういった場で白文を活用できるようになったのは、大学の授業や読書会で勉強をしたおかげだと思います。

他に iPad があることで変わったこととしては、授業中分からない言葉や分からない文字について生徒がその場で調べることができるようになったことです。例えば『韓非子』の「矛盾」に出てくる「鬻ぐ」という字など、複雑な字であり、大きく板書する必要があったかと思いますが、iPad によりこの字をどう書くのかという質問が減りました。

授業で「鶏口となるも牛後となるなかれ」の言葉を残したとされる蘇秦の略歴を紹介する際、死後拷問をされた話にも言及しました。その時は生徒がこぞって iPad を用いて「車裂きの刑」などを調べだし、結果クラスの生徒が拷問の種類

に詳しくなるということがありました。授業がわき道にそれると、iPad がそれを加速させ、生徒がしばらく戻ってこないということもありました。

一方で、課題等で書き下しを求めるとその場で答えを調べて書き写すだけという生徒も見られ、iPad を活用する難しさも味わいました。

裏を返せば本文の内容について生徒がそれぞれ調べられるので発展課題等で本文内容以上のことを聞くような活動はやりやすくなったかもしれません。同時に iPad は写真撮影や映像等の作成も可能なためその機能を生かした授業もできると思います。

5. 授業での取り組み——パワーポイントの利用

勤め始めた時期が、コロナ禍とぶつかり、初年度は6月まで学校が休校で、授業が始まって夏休みまでは大学の校舎を利用して授業をすることになりました。二年目は普通に高校の教室での授業でしたが、体調不良などの理由で休む生徒もおり、オンライン授業になる可能性なども考えてパワーポイントを利用して授業を進めていました。特にパワーポイントを用いた解説後の時間が有効かと考えています。解説後、パワーポイントの板書は表示したままであれば、生徒はノートにとるため、その時間帯を活用して生徒がどの程度ノートを書いたか、どこで詰まっているかなどが、机間巡視で確認しやすくなりました。授業と関係ないことをしている生徒に絡みに行くことも可能です。

ただある程度パワーポイントの制約に縛られるので、板書で授業を進めるほどのフレキシブルさはないと思っています。数学の教員の中には生徒と授業のパワーポイントを共有して授業を進めるという人もいました。オンラインで課題を出す人もおり、生徒が空き時間に iPad を利用して課題を提出するという光景も見られるようになりました。教員側も課題の確認が楽になったため宿題が多すぎて困るといった生徒の話も耳にします。

ただそれと同時に、iPad があるおかげで便利になったことは多々ありますが、今まで行われていたような単純な知識を聞くだけの様な問いはその場で調べられてしまうので、課題の作り方にはさらなる工夫が必要であると考えます。昨今言われている通り、情報を知っていることより、その情報をどのように扱うかが重要になっているので、既存の知識伝達型の授業からの脱却が教員の側の課題になると感じています。

6. 今後どのような授業が求められるか

自分が高校生のころ、古典（古文・漢文）という科目は主に授業で文法を扱い、

内容の面白さは教師が説明するような授業でした。おそらく、受験対策を念頭に置いたものであり、読み方、解き方を説明する授業でした。その中で授業の楽しみといえば教材にちなんだ豆知識の話でした。元から古典文学が好きだった自分としてはもっと楽しい授業をうけたいと思っていました。

しかし実際に教壇に立ってみると知識ばかりの授業になる理由もわかりました。現代文のように古文を読みこなせる生徒を自分の手で育てねばならないこと、そしてその生徒を定期試験で評価しなければいけないこと、また受験、模試などで一定の成果を上げられるように育てねばならないこと。これらのことを達成するにはやはり知識に偏るのも仕方がないということを知りました。

漢文の授業のコマ数はすくなく、教えるべきことは古典文法の知識に加え、漢文の句法などの知識も必要です。教員側も現代文は好きだが古典は苦手という人や、古文はいいけど漢文は苦手ということもあります。そして、成果を示す古典の模試で古文漢文か、古文のみを選べる試験もあります。故に漢文に向かうモチベーションの維持が難しくなっています。

しかし、サブカルチャーに目を向ければ、ライトノベル、漫画、アニメ、ゲームで古典籍由来の作品は多数あり、クラスで四、五人は史記の始皇帝本紀の内容について『キングダム』で予習し、自分よりも深い知識を持っている生徒もいます。

現状、漢文に対して苦手意識を持つ人が多く、時間が区切られた中でいかに楽しい授業ができるかが自分の課題です。

また、指導要領や科目の改訂によって古典は「古典探求」に名前が変わります。古典探求は古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視した科目です。

昨今、本屋に孫子のビジネス兵法のような本を見かけます。漢文教育で求められるのはこのような知識の利用法だと思います。学んだことをどのように生活で生かすのかを評価基準にするべきです。しかしこの先も、どう生かしたかを評価できるのは授業点（平常点）で評価全体の2割程度であり、重視されるのはテストに対応できる知識のままでしょう。このあたりのギャップが今後の課題だと思います。

この状況で漢文を愛する生徒をふやす方法は、いかにオタクとして布教できるかにかかっていると思います。漢文が元ネタの漫画やアニメ、ゲームの話を生徒と共有することで生涯の学びにつながる人も現れると思います。

（なかむら たかし・修士課程）